

# 風祝神奇譚

夢……夢を見ていた。

朧げな意識の中、見覚えがあるような景色がぼんやりと映っていた。

出来れば思い出したいくない……自分の中に閉じ込めておいた遠い日の追憶。

あの日、自分の大切なものを失った日——初めて己の無力さに嘆いた日であった。

ここが、全ての始まりだった。

冷たく刺すような風が深い闇に覆われた巨大な湖を駆け抜けていく。

水面に反射する月と辺りの草木がそれに合わせて音もなく揺れ、湖の周辺はしんと静まり返っていた。

そんな湖の畔に幼い少女が一人、何かに祈るように湖に向かって両手を組み、目を閉じて黙っていた。

その少女の後ろには、同じ緑色の髪をした東風谷早苗こちやまなえが立っていた。

(これは……一体……?)

唐突な出来事に早苗は驚きを隠せずにはいた。今こうやって意識を取り戻す前は、たしか元

## プロローグ

の幻想郷へ帰還している途中……光の柱の中に居たはずだ。

しかし、今はこうやって全く別の場所に立っている。それに目の前に広がる光景——祈りを捧げている少女には、心当たりがあった。

（そうだ、この日は……）

あまり思い出したくもない記憶が蘇り、早苗の表情が曇る。まるで古傷を抉られているような錯覚を覚える。

早苗はそつと少女の肩に手を沿えようとする、

「……早苗！」

突然頭上からその名前を呼ばれ、早苗の手がピクリと止まる。声の主が少女の隣に降りてきて早苗の代わりにその体を強く揺らした。

そこに現れたのは洩矢諏訪子であった。早苗の知る普段明るい彼女とは違い、とても辛そうな表情を見せていた。

どうやら、早苗の姿は二人には見えていないらしい。諏訪子が『早苗』と呼んでいたのは目の前に居る少女……そう、幼き日の早苗の事であった。

「またなんでこんな所に……ほら、早く戻らないと——！」

「いやです!!」

諏訪子が無理矢理連れて行こうとすると、幼い早苗は全力でその腕を振り解いた。

「早苗！ そんな事をしていてももう……!!」

「いやっ!」

幼い早苗は大粒の涙を浮かべながら再び念じ始めた。

「だって……出来るようになっただもん、奇跡は起きるんだもん!!」

「早苗……」

諏訪子は俯いて感情を押し殺したかのように幼い早苗に告げる。

「諦めるんだ……奇跡だってそんな都合のいい事ばかり起きる訳じゃない」

「絶対に諦めない! もうお母さんを助けられるのは……私だけなんだから!」

そう、この日は母の最期の日であった。

それは早苗が神奈子の力を代行して使えるようになり、風祝としての第一歩を踏み出し始めてすぐの事であった。早苗の母親は不幸にも大病に侵されてしまったのである。

すぐに良くなる——と本人は言っていたが、病状は良くなるどころか徐々に悪化し始め、そして……ついに最期の時を迎える事になってしまった。

その事を理解してしまった早苗は家を飛び出す。初めて奇跡を起こす事が出来た場所へと向かい、自分の最愛の母が助かるように、奇跡を起こそうと只管念じていた。

だが、決まっていた運命を無理矢理捻じ曲げるという奇跡を起こすには、幼い早苗では到

底力不足であった。また、この頃は既に神奈子と諏訪子の力はかなり衰退しており、二柱の力を使ってもそんな奇跡は起こす事は出来なかった。

「帰るよ、お前の母さんに頼まれたんだ。早苗が傍に居てほしいって……」

そう言った諏訪子は無理矢理幼い早苗を担いだ。早苗は当然泣き喚きながら暴れるが、諏訪子は険しい表情のまま地面を蹴飛ばし、夜の闇へと消えて行ってしまった。

「……………」

湖は痛々しい程の静寂に包まれ、早苗は唇を強く噛み締めた。

物悲しい表情で水面に映る月を眺めながら、この後に起こった事を思い出していた。

諏訪子に連れ戻された早苗であったが、奇しくも母親は既に事切れていた。

それから暫くの間、早苗は「人を救う事も出来ない奇跡なんて」と風祝の力を使う事を拒み、母親の死を嘆き悲しむ日々が続いてしまったが、神奈子と諏訪子、父親が支えてくれたおかげで、時間は掛かってしまったが再び風祝としての自信を取り戻す事となった。

人生で一番思い出さなかった記憶を呼び起こされ、意気消沈していた早苗であったが、不意に背後から声を掛けられる。

「くんばんは」

「！」

その声に驚いた早苗はすぐさま後ろを振り返ると、そこには今さっき諏訪子に連れて行かれたはずの幼い自分の姿があった。

「何故あなたが……」

「何故って……それはここがあなたが見ている夢だから——かしら？ 私もこの時の事がずっと忘れる事が出来ないの、今でも思い出す度に……ここが苦しくなる」

幼い早苗が胸の辺りをぐっと押さえる。早苗は状況が上手く飲み込めておらず、何から聞き出せばいいのか考えていると、幼い早苗はまるで見透かしているかのように、早苗の疑問に答え始めた。

「私が一体何者かですって？ うふふ、可笑しな事を聞くのね。私はあなた、あなたは私じゃない」

無邪気にくすくすと笑う幼い早苗に対し、早苗は渋い顔を作った。

「そう怖い顔をしないで、あなたが思っている通りよ。私はあなたの中で芽生えていたもう一人の東風谷早苗、正確に言うならその残留思念の一部というやつね」

「残留思念……?」

幼い早苗はこくりと頷く。

「そう、本当の私……もう一人のあなたは既に分離しているわ。私はその残りカスみたいなもの……そんな事より、どうして私達が『ここ』に居るか分かるかしら？」

その問い掛けに早苗は首を横に振ると、幼い早苗は小さな溜め息をつく。

「……ここがね。始まりの場所だからよ」

「ここが？ 一体どうして?」

「この日、私の中でもとても強い感情が生まれてしまったの、それが何だか分かるかしら？」  
「そ、それは……」

この時抱いた事と言えば、己の無力さに嘆いてしまった事だ。奇跡を起こそうと奮闘したものの、実際には何も起こらず、結果的に母の最期の願いも聞き届ける事は出来なかった。「そう、あなたは自分の力に対して遜色えじくしたりしていたわね。そこで『負』の感情が芽生えてしまった。ただ、そんな感情は誰もが抱えている事で何もおかしい事ではないわ。でも、あなただけは違った。何故だと思おう？」

「何故って言われても……」

早苗が首を横に振る。全く心当たりがなかった。

すると突然、幼い早苗が先程と同じように湖に向かって祈り始める。

「……まさか!？」

——気付いてしまった。この時、何も起こらなかったと思いついていた奇跡は、早苗の知らないところで起こってしまったのだ。

「そう……あの時の奇跡はしっかりと届いてしまったの、全く意図していないところでね。それがあなたの中で……もう一人の東風谷早苗を生み出してしまった」

「そんな……馬鹿な事が……」

早苗はとても信じられなかった。もしもそんな事になっていれば、どうして今頃になって表に出てきたのか理解が出来なかった。

「認めたくないのも分かるけど、それが真実なのよ。でもね、生まれてしまったもう一人の私は、何もする事が出来なかったの、だってまだ非力な私が起こせる奇跡なんてたかが知れてるし、途中で立ち直る事が出来たんですもの」

「じゃあなんで……！」

困惑の表情を見せる早苗に、幼い早苗が目を閉じてこう語った。

「同じようにあなたは負の感情を溜め込んでいたからよ。忘れていたなんて言わせないわ……あの日の出来事を！」

幼い早苗が叫ぶのと同時にその体から光が溢れた。視界は完全に白一色の世界に染まってしまった。

早苗が思わず顔を背けて目を閉じるが、その光はすぐに収まった。

「……ここは!?」

眼をゆっくり開くと、先程まで湖に居た筈の早苗は守矢神社の縁側に立っていた。ふと空を見上げると、先程と同じように丸い月が静かに、そして冷たく早苗を見下ろしていた。

「——今すぐにはとは言わない。二、三日ゆっくりと考えておきなさい」

背後で聞き覚えがする声があった。早苗は咄嗟に振り返ると、居間のテーブルには見知った人間が二人座っていた。

一人は早苗自身だった。さっきの幼い早苗より成長していたが、まだ少しあどけなさが残っ



ている。どちらかと言うと今の早苗により近い姿をしていた。

そして、もう一人は早苗の父親であった。髪は歳相応に白髪交じりとなり、少し細身の体格は外の世界で最後に見た父親と何一つ変わっていないかった。

「……はい」

もう一人の早苗は暗い表情で返事をする、その場で立ち上がる。

「どうしても、他に方法はないのでしょうか……？」

その問い掛けに、早苗の父親は難しい顔付きで首を横に降った。

「そう、ですよね……ごめんなさい」

謝ったもう一人の早苗は、それだけ言う、と縁側へ立ち去ろうとする。障子に手を掛けたところで「おやすみなさい」とだけ言って自室へと戻って行った。

早苗はまたもや険しい表情で俯いた。

「これは……たしか……」

そう呟いた時であった。

「そう、これは神奈子様と諏訪子様の為、私かお父さんのどちらかが、神奈子様達に付いて幻想郷へ移住しなきゃいけない——そう告げられた日よ」

自室へ戻っていた筈のもう一人の早苗が不意に現れる。

「ええ、この日の事も覚えてます。誰が……忘れるものですか」

「ここで再び負の感情が膨れ上がった。自分達ではどうする事が出来ない絶望感に加え、神

様を信仰する事を忘れた人間達をね」

「……………」

もう一人の早苗の言う事に反論する事が出来ない。

「そして、極めつけはこれね」

そう言った瞬間、先程と同じように世界が光に包まれ……弾けた。

今度は守矢神社の境内へと移動していた。陽が傾き始め、青と橙色のグラデーションが綺麗に空を染め上げていた。

視線の少し先には神社の拝殿が見え、その手前で二人の少女が争っていた。

大奇跡「八坂の神風」

争っていたのは、あの時の早苗と博麗<sup>はくれいれいむ</sup>霊夢の二人であった。その状況は一目瞭然で霊夢は無傷にも関わらず、スペルカードを宣言した早苗はポロポロであった。

これは初めて霊夢と決闘をした時の追憶である。結果は言うまでもなく早苗の完敗だった。全身全霊を掛けて戦った。だが、それでも霊夢の足元にも及ばなかったのだ。早苗が持つ最強のスペルカードも呆気なく破られてしまう。

石畳に体を叩き付けられ、早苗は仰向けに倒れたまま動かなくなってしまった。

「やばっ、ちょっとやり過ぎちゃったかも」

慌てて霊夢は早苗の元に駆け寄ると、心配そうに顔を覗き込んだ。

「……っ！」

霊夢は早苗が気絶しているだけという事が分かると、妖怪とは違ってこのまま放置しておく訳にもいかず、早苗の体を抱き抱えて拝殿まで移動する。

「悪いけど、ここで勘弁してね」

階段の上でその体を下ろし、霊夢は湖へと飛び立って行った。

——その一連の様子を二人の早苗が眺めていた。

「初めてでした。他人との力の差をここまで思い知らされたのは……」

「後で神奈子様も勝つ事が出来なかつたと知って、私が味わった屈辱は計り知れない……そしてついに、私は目覚めたのよ！」

そう言ったもう一人の早苗は、隣に居た早苗の首を突如締め上げた。

「ぐっ……な、なにを……！」

早苗は必死にその手を引き剥がそうとするが、その腕は鋼のように硬くビクともしない。

「ねえ？ 元の幻想郷に戻るなんて止めて、今の幻想郷にずっと居ましようよ。少し配役が違っただけで、霊夢さんや魔理沙さん、神奈子様にも諏訪子様だって居る。それにあなた……思っただけでしょう？ このままここに居てもいいかもって」

「そ、それは……」

「元の幻想郷ではあなたはただの風祝、霊夢さんと違って色んな者達に慕われている訳ではない、でもこっちはどう？ あなたは博麗の巫女という大役を勤め、周りからの信頼はかなり厚い。ほら、どっちが良いかなんて考えるまでもないんじゃないかしら？」

「だ……め……！」

痛みと苦しきで早苗の顔が苦痛の表情に歪む。だが、首を締め上げるもう一人の早苗はへらへらと笑っていた。

「それに、あなたが戻ったなんて事を私が知ったら、絶対に無事じゃ済まされないわよ？ 今度は何が起きても不思議じゃないわ。それでも……戻りたいの？」

早苗は目に涙を浮かべながら必死にこくこくと頷く。

「……………」

もう一人の早苗は少しの間苦しむ早苗を無言で見つめ、その手を離す。

「…………げっほげっほ!!」

解放された早苗はそのまま崩れ落ちて咳き込んでしまった。

「ほんとに強情な人……知らないわよ。あなたが生み出してしまったもう一人の『コチヤサナエ』という存在が、どれほど惨憺さんたんたる存在なのかを……」

もう一人の早苗がそう告げると、早苗に背を向けて歩き始めた。

「いほっ！ ど、どこへ……！」

「……タイムリミットよ。この夢も終点がそこまで来たの。もう、二度と会う事はないでしょうね」

「ま、待って！ 私はまだ聞きたい事が——」

早苗は追い掛けようと立ち上がった瞬間、足元の石畳が突然崩れ始めた。

「えっ……!?」

突然の事に成す術もないまま、瓦礫と供に闇の中へと落下していった。飛行をして地上へ戻ろうとしても、体には力が入らない。

早苗は底知れぬ闇へただ落ちていくだけであつた——。

§

「！」

早苗はガバツと勢いよく起き上がった。嫌な汗が全身に流れ、呼吸も酷く乱れていた。

「あつ、ここは——」

部屋の中をぐるりと見渡すと、ここはどうやら博麗神社のようであつた。外の様子からして既に夜を迎え、部屋の中まで暗闇が支配していた。

「まさか、全部……夢？」

早苗は咄嗟に自分の襟足に触れてみた。

「短い——という事は」

今までの事は夢なんかではなかった。袖の中に手を入れてみると、ちゃんと陰陽玉が二つ入っていた。

「それに、今のは一体？」

何か酷い悪夢を見ていたような気がしたのだが、どんな夢だったか曖昧でよく思い出す事が出来なかった。もやもやとしながら立ち上がろうとすると、力を入れた左手の手首に痛みが走った。

「あいたつ！」

思わず手を上げると畳の上には何も無い。どうやら袖の中に入っている何か当たっていたようだ。

「ごそごそと袖の中を探ると、そこには意外な物が入っていた。

「あれ、たしか置いてきたような気がしたんだけどなあ」

早苗はそれを掴んでまじまじと眺める。出てきた意外な物とは鍵山雛かぎやまひなから受け取った白人形であった。

前の幻想郷に置いてきたと思っていたのだが、何かの拍子で紛れ込んでしまったのかも知れない。一応、お守りとしての効果もあると言っていたのでそのまま袖の中に仕舞っておく事にした。

照明の紐をグイッと引つ張ると、チカチカと点滅して部屋の中が白い明かりに包まれる。

「あっ」

自分が今まで住んでいた博麗神社のレイアウトが違っていた。早苗は壁に掛けてあった日めくりカレンダーを見ると『第二百二十四紀・長月』と書いてあった。

「戻って……来たんだ」

早苗はあまり戻ってきたという実感が湧かなかった。どちかと言えば、帰ってきた喜びよりも若干喪失感の方が大きかった。あれだけ帰りたいと思っていたのが嘘のようである。

カレンダーの日付をよく確認してみると、宴会があつてから一日しか経っていない事が分かった。早苗はまず霊夢の部屋へと足を運び、襖をそつと開けて中を除き込む。

「霊夢さーん？」

しかし、暗い部屋の中はがらんとしていて人が居る気配はない。既に就寝しているのかと思つたのだが、布団はしっかりと畳まれていた。

「あれ、どこに行つたのかな」

その後、家の中を隈なく探しても霊夢の姿を見つけない事が出来ず、早苗は再び茶の間へと戻ってくる。

壁掛け時計を見ると、時刻は午後七時半を回つたところであつた。

「どこかに出掛けたのかしら……」

色々報告しなければいけない事があつたのだが、居ないならば仕方がない。

早苗は外へ飛び出し庭先で頭上を見上げた。あの日に見たものと同じ十六夜の月が早苗を静かに見下ろしていた。

「帰ろう……守矢神社に」

守矢神社には恐らくもう一人の自分が居るはずだ。どうしてこんな事が起きてしまったのか、真実は彼女のみが知っているのだろう。

場合によっては……相手が実力行使に出てくる可能性も否定は出来なかった。

「……よし！」

早苗は気合を入れて両膝に力を入れ、飛び立とうと思った時である。

「あら、そこのお嬢さん、ちょっと待ちなさいな」

聞き覚えのある声が聞こえ、早苗はその場で踏み止まった。思わず声の方へ振り向くとそこには八雲紫やくもむらが立っていた。

「こんにちは……それとも、お久しぶりと言った方が良いかしら？」  
とても穏やかな表情をした紫がこちらにゆっくりと近付いてきた。

「紫……さん」



目の前に映る紫は少し前まで世話になっていたあの紫とは違う。あちらの紫も言っていたが、今回の出来事に一枚噛んでいる可能性はあると言っていた。

そんな事を思っていると、気付かないうちに自然と表情が強張ってしまっていた。

「そんな怖い顔をしなくて頂戴、あなたが向こうの神社へ戻る前に、一つだけお話をしなげようと思つてね」

「どういう——事でしょうか？」

「あなたも知りたいでしょう？ 自分の身に一体何が起こったのか……ね？」

そう言われてしまつては領かない訳にはいかなかった。紫は縁側に腰を掛けると、スキマから小さな徳利と二つのお猪口を取り出した。

「少しぐらいならあなたも平気でしょ？ ほら、座つて座つて」

「あつ、はい」

気持ち奮い立たせていたが、紫の登場によって一気にクールダウンしてしまった。

よく考えれば、異変解決のような切羽詰った状況でもない。先に真実を聞いてからでも遅くはなかった。

早苗はお猪口を受け取つてお酌をしてもらうと、二人は乾杯をする。静寂に包まれた博麗神社に陶器がぶつかる甲高い音が鳴り響いた。

早苗は透き通つた水をジッと眺めていた。少し前までは一杯飲んだだけでもうへ口へ口に なっていたのだが、向こうで度々開かれる宴会に付き合っているうちに、人並み程度までに

強くなっていた。

「平気よ。毒なんて入ってないわよ」

「あ、いえ……すいません、ちよつと考え事していたもんで」

そう言ってお猪口に入っていた酒を半分ぐらいまで飲み込んだ。

「さて……どこから話した方がいいかしら？」

「それはもちろん——」

そんなものは決まっていた。

「最初から、です」

「そうよね。聞くまでもなかったわね」

そう言つて紫は頭上を照らす十六夜の月を見上げた。

「あなたが先に酔い潰れた後、霊夢達もそれに続いて寝てしまつて、私は一人で静かにお月見を楽しんでいたわ。そして——」

紫の口から、あの日の真実が語られるのであった。

§

既に丑三つ時を過ぎ、美しい月は徐々に山の向こうへと傾き始めた頃であった。今と同じように縁側に腰掛け、一人で静かに酒を飲んでみると、床の軋む音が聞こえて思わずその方

向へ振り向いた。

「……また変な時間に起きてしまったのね」

紫の前に姿を現したのは早苗であった。酔いが抜け切っていないのか、月光に照らされたその顔はニコニコと笑みを浮かべていた。

「そうでもないです。あ、皆も寝てしまったのですね。だったら尚更都合が良い」

「都合が良い？ それはどういう意味かしら？」

紫は早苗の事をジッと見つめる。何者かが化けている様子は見受けられないが、いつもの早苗とは違う雰囲気だ漂っていた。

「うふふ、実はどうしてもお願いしたい事がありました」

「お願い……ね、内容によるわね」

「そんなに難しい事ではないと思いますよ。私の——て頂ければいいんですから」

「……何ですって？」

早苗から耳を疑うような事を告げられ、思わず紫は聞き返してしまった。

「ですから、私の存在を二つに分けて頂ければいいんですよ」

早苗は平然とした顔で言った。

「あなた……本物の早苗じゃないわね？」

紫が座ったまま早苗を睨み付けると、早苗は戸惑った表情で答えた。

「いやあ、一応ですけど私も本物の早苗ですよ？ ただ、いつも表に出ている方ではありません」

せんけどね。しいて言うならそう、神として祀られている部分が今の私……とでも言っておきましようか。いつもの私がぐっすりと寝ているからこそ、普段表に出て来れない私がこうやって現れているのです」

「にわかには信じられない話だけれど……それで？ 何が目的なのかしら？」

紫がそう尋ねると、早苗が口元を緩めた。

「人間でありながら同時に神でもある、この現人神という半端な立場というのが嫌になってしまったのですよ。人としての私はまるで気にしていないようですが、神である私にとって人間の部分はただの足枷あしかせでしかないのです」

「……要は自分にとって都合が悪い部分を切り捨ててくれ、って解釈でいいのかしら？」

紫がさらりと言い放つ。しかし、早苗は表情一つ変えずその言葉に頷いた。

「ふふっ、お察しが良い事で助かります」

「もしも切り離しに成功したら、もう一人のあなたをどうするつもり？」

「そうですねえ、こうする予定とかは特に決めてませんが……同じ幻想郷に東風谷早苗は二人も要らないでしょう」

「つまり、あなたは分離した方をその手に掛けるという事なのかしら？」

ザックリと言う紫に、不要だと発言した早苗も首を横に振った。

「さ、さすがにそれは……ですが、この幻想郷からは消えてもらいますよ」

「……随分と身勝手な事を言うのね。ちなみに私が断ったらあなた、どうするつもりなのか

しら？」

「駄目なら仕方ないです。別の方法を見つけないですかね」

早苗は苦笑いを浮かべる。諦めるつもりは毛頭無いようだ。

「そういえばあなた、奇跡を起こす事が出来るんじゃないかな？ 私に頼まないでも、自分で何とかすればいいんじゃないのかしら」

「いやあ、紫さんの言う事はごもつともなんですけど、そんなに都合の良い奇跡を起こす事なんて私には出来ないんですよ。莫大な信仰を集める事が出来れば、そのような奇跡を起こす事が出来るのですがね。人の身体ではとてもそんな力に耐え切れません」

早苗がそう言うと、紫は何か考え込むように黙ってしまった。

二人の間に暫し沈黙が訪れる。先に口を開いたのは紫だった。

「……まあいいわ。あなたのお願ひ、特別に聞いてあげるわ」

「ほ、本当ですか!？」

早苗は嬉しそうに目を輝かせる。一方の紫は無表情のまま早苗に近付いてこう告げた。

「ただ、一つだけ忠告するわ。いくら私が境界を操る事が出来るとはいえ、その力を生物に加えた瞬間、創造を絶する重圧がその身に掛かる。それに耐える事が出来なければあなた……どうなるか理解しているのでしょうかね？」

「は、はい」

紫の脅すような言葉に早苗はこくこくと頷いた。

「分かったわ。でも、あなたが思っているほど楽なもんじゃないわよ」

真剣な表情になった紫は、早苗の頭に自分の手を置いた。

「……うっ!?」

すると、早苗の表情が一瞬にして豹変する。大きく目を開き、苦しそうな様子で後退りをする。

「苦しいでしょうね。でもそれに耐えられなかったらお仕舞いよ。無事に分離するか、それともそのまま息絶えてしまうか……それはあなた次第」

「ばっ……!!　これは……!!」

早苗は膝を折って項垂れる。並大抵の精神力でない限り、人間ではとても耐えられない力に蝕まれていた。

（こんな思いまでして……一体何がこの子を駆り立てているのかしらね？　そこまで人である事を捨て、純粹な神になりたいのかしら）

獣のような呻き声<sup>うめ</sup>を上げながら、ただその重圧に耐えている早苗を紫はただジッと眺めていた。これだけ騒ぎ立てていれば誰かしら起きてきそうなもののだが、茶の間をチラリと視線を向けてみても、三人は見事に熟睡していた。

暫く早苗がもがき苦しんでいる姿を見下ろしていると、やがて早苗の体が黒い霧<sup>も</sup>に包まれはじめた。

（意外ね。まさか本当に耐えるなんて思わなかったわ）

## プロローグ

紫は最初から耐え切れずとは思っていなかった。本当に死なれてしまつては後々面倒だと思ひ、ギリギリとところで解放してやろうと思つたのだが、どうやらその必要は無かつたようだ。

「うっ、ああああああ!!」

早苗が後ろに仰け反るように体が跳ねると同時に、その体から前方に黒い塊が生まれた。そして、早苗と塊を包んでいた闇が徐々に消え始め、やがて元の姿に戻っていく。

「はあ、はあ……!!」

早苗は長距離を走ってきた後のように呼吸が乱れ、全身は冷や汗で一杯であつた。そして、早苗の目の前には――、

「……すう」

全く同じ姿の早苗が小さな寝息を立てながら倒れていた。

「やっ……た？ は、ははっ……!」

ついに現人神だった早苗と分離し、純粋な神となつたコチヤサナエは呼吸を乱しながらも、ただ只管に喜んでいた。

「はあ……こ、これで、ようやく私は解放されたのね……!」

「それで？ あなたはこれからどうするつもりなのかしら？」

「紫の問い掛けに、ふと我に返ったサナエは薄笑いを浮かべる。

「どうするって……どうもしないですよ。私はこれまで通りに普通に風祝としてやっていくつもりですよ」

「……そう」

本人がそう言うのならば余り構う必要はないだろう。少々傲慢な部分が見て取れるが、この幻想郷を混乱に陥れたりするようなタイプではないと判断した。

そんな事を思っていると、サナエが足元で寝ている早苗を抱き上げた。

「よいしょっと……それでは紫さん、本当にありがとうございます。それと……こんな事を申し上げるのも変なんですけど、どうして協力して下さったのですか？」

「ふふっ、そうねえ……興味があったから——かしらね」

「興味……ですか」

「ええ、幻想郷は全てを受け入れるわ。例えばそれが破滅の道へ繋がる事になってもね」  
破滅という単語にサナエは眉をピクリと反応させる。

「この私が……破滅すると仰るのですか？」

「言ったでしょう？ 例えは……、蟻の穴から堤も崩れるって言うじゃないの」

「え、えーっと……蟻の穴から——ってどういう意味でしょうか？」

サナエは恥ずかしそうに照れ笑いをすると、紫は簡単に説明した。

「つまり、ちよっとした油断でとんでもない大失敗が起きるってこと、あなたも神様として



やっていくなら、もっと勉強した方がいいわよ。人とは違って、あなたには無限に近い時間があるんですから」

「えっ、そ、そうですね！ 精進します」

「それと最後に一つだけ、切り離したその子は？」

サナエが抱きかかえているもう一人の早苗を見ながら紫が問い掛けると、サナエはバツが悪そうにしながら答えた。

「……先程も言いましたが、東風谷早苗という存在は同じ幻想郷に二人も要りません。まあ、悪いようにはしませんよ」

「ならいいけど、始末をするならしつかりした方が身の為よ」

「ええ、ご忠告感謝致します。それではこれにて……」

サナエが軽く頭を下げると、もう一人の自分を抱えながら踵を返す。そのまま霊夢の部屋に引き返すのかと思っていると、一旦立ち止まったサナエが振り返って紫にこう言った。

「……おっと、この事はどうかご内密にお願いしますよ」

「ええ」

紫の返事を聞いたサナエはクスッと笑い、黒い廊下の奥へと消えて行くのであった。

再び神社は静寂を取り戻すと、紫は大きく息を吐いた。

(あの子は『この』幻想郷から消えてもらおうと言ってたわね。という事は……)

奇跡の力で転移させるのだろう、別の幻想郷に。

この世界は可能世界と呼ばれる「ありとあらゆる可能性の組み合わせ」によって創造された世界の一つに過ぎない。

可能性の数だけ広がる世界、その数は無限とも言ってもいい。そのどこかに送り込んでしまえば、二度とここへは戻って来れないであろう。

そう、奇跡でも起きなければ……。

少し気の毒だとは思ったが、他人を貶める訳ではなく、本人がああやって頼んできたのだ。安易に断ってしまったのは早苗にとって酷なものになる可能性があっただろう。

果たしてどちらが正しかったのか？ それは紫にも分からなかった。

そして、何事もなかったかのように一人でお月見を続けていると、近場で結界に歪みが発生した事に気付いた。

まさに一瞬の出来事であり、サナエが消えた方向へ振り向いた時には結界は元通りになった。それを確認した紫は立ち上がり、神社を後にするのであった。

## §

「——以上、昨晚ここであった事の全てですわ」

紫の話の聞いていた早苗は、途中からただ呆然としていた。あくまで推測に過ぎなかった

もう一人の自分の存在が……確然たるものになった。

そして、当然浮かび上がってくる疑問があった。どうして紫はもう一人のサナエに協力したのだろうか、早苗はその事について尋ねる事にした。

「紫さんはその……何でもう一人の私の願望を聞き届けてしまったのですか？ もしあそこで断ってくれたら、私はこんなにも……大変な思いをする事はなかったかもしれないのに」  
「……まあ、あなたが私に怨み言を言うのは仕方ないと思うけど、私があそこで断っていたら、もっと大事になっていたかもしれないわよ？」

「えっ!？」

紫の口から意外な言葉が飛び出すと、早苗は驚愕の表情を見せて言葉を失ってしまった。

「いくらあなたの意識が無かったとはいええ、もう一つの人格がああやって表に出てくるという事は……そう遠くはない未来、確実に乗っ取られるわよ」

「そ、そんな……!」

「それと、もう一人のあなたから驚くぐらいの負の感情が滲み出ていたの、本人は必死に隠していたつもりだろうけど、よくもまああそこまで溜め込んだ事ね」

負の感情と聞いた瞬間、早苗の頭の中で何か引つ掛かるものがあった。だが、今まで生きていた中で、そこまで思い詰めた事なんてなかったはずであった。

「どうしてそうなってしまったのか、あなたに覚えがないのなら本人に直接聞き出すしかないんじゃないかしら？ 私はあれを放っておくのは得策ではないと考えたわ」

「……………」

「正直に言ってしまうえば、これはあなたの問題だから私としてはどうでも良かったわ。でも、あの子が躍起になって暴走をする事があれば、この幻想郷に災厄を振り撒く存在になる可能性がある。私はそう感じ取ってしまった。何か問題が起きてからでは遅いもの、多少の面倒事でも芽は早めに詰んでおくものだわ。分離したあなたを助けてあげようかと思っただけれど、すぐにあの子が抱えて行ってしまったから……だから、ちよつとしたお守りを忍ばせておく事ぐらいしか出来なかつたわ」

「お守り……ですか？」

早苗はお守りと聞いてもしっくり来なかつた。たしかに今現在お守りを所持しているが、それは紫から貰つた物ではない。

「あら、やっぱり使わなかつたのね？ あの手引書」

「いや、まあ……えっ、手引書!？」

早苗は驚きのあまりに立ち上がってしまった。一方の紫はぼかんとしている。

「あの何で入っていたのか分からなかつた命名決闘の手引書は紫さんが!？」

あの時はあまり深く考えた事がなかつたが、あんな物を気付かれないで仕込んでおくのは紫以外に居るはずもなかつた。

「ふふ、その様子だとどうやらしつかりと役に立ったみたいね。じゃあ今度は私から色々聞いて良いかしら?」

## プロローグ

「えっ？ それは構いませんが……何から話した方がいいんですかね？」

その言葉に紫はにっこりと微笑んだ。

「もちろん『全部』よ」

「……ですよね」

こうして、早苗が過去の幻想郷に飛ばされ、ここに戻ってくるまでの二年にも及ぶ出来事を包み隠さず話すのであった。